

2020 年度第 1 回情報教育研究委員会情報専門教育分科会議事概要

I. 日 時：令和 2 年 10 月 15 日（木）17:00～19:00

II. 場 所：Zoom 会議室

III. 出席者：大原主査、藤田委員、佐野委員、高田アドバイザー、齋藤アドバイザー
（事務局）井端事務局長、野本

IV. 議事内容

1. 「大社接続」による教育プログラム共同開発の可能性と課題について

- ・ 昨年度は、「長期インターンシップ」、「PBL」、「リカレント教育」、「コンテスト」の現状と課題について整理した。
- ・ 社会が DX（デジタルトランスフォーメーション）の流れの中、大学も取組む必要があり、文科省から遠隔と対面の学びが求められている。
- ・ 優先順位として、ニューノーマルな社会の中で、全てはできないので、教育のオープンイノベーションとして PBL を重点的に考えてはどうか。
- ・ PBL の課題では、教育の一環としてオープンイノベーションを位置づけているところが少ない、自治体の課題や企業のスタートアップ的なサービス・商品開発など、教育の一環としてオープンイノベーションに参画する呼びかけが求められる。

2. 「大社接続」による PBL モデルの方向性について

「新しい価値の創造を目指す PBL 授業の普及・推進方策」、「社会を交えた学びの場としてのプラットフォームの形成」、「分野横断型教育の到達目標と点検評価の方法・視点」についてのメモが提示され、学内で PBL を組み立てる戦略・仕組みづくりなどを検討することにし、意見交換をした。

- ・ キーワードとしては、DX、生産性向上（企業）、PBL（大学）が考えられる。
- ・ DX はビジネスが出口であり、生産性やデジタルへの取組みが遅れており、どのように改善するのか、どのような切り口で出すのが課題ではないか。
- ・ PBL とどのように組むかはサイバー空間との組合せが考えられる。
- ・ 世界に打って出られるような教育が必要ではないか。
- ・ プラットフォームの図は理想の形であり、社会・地域と大学が手を組んで、対面・ネットの組合せで、大学が対応可能なモデル図つくってはどうか。
- ・ 教育の DX は、タコソボ型教育を打破する学修となろう。
- ・ コロナ対策でネット利用が進んだことから、一般の教員の理解も進んでおり、スタートラインには立ったと思われる。学生評価は、ディプロマポリシーに対して数値化できないか考えたい。
- ・ 企業は、課題解決に若い視点を活用するメリットがあるのではないか。
- ・ 一定の理解がされるレベルでのモデルが必要ではないか。
- ・ DX について、企業は会社全体の意識変革を目指しており、大学は世界に貢献できる人材をどのように輩出できるのか、そのための教育ステージが必要ではないか。
- ・ プラットフォームは小さいエリアで構成し、VR サービスをつくるプロジェクトで集まる環境を例にしてはどうか。例えば、ゲームに多くの要素があり、そこから一つを取り上げてはどうか。
- ・ 文系に理解してもらう切り口として、AI・データサイエンスのテーマをあげてはどうか。
- ・ 関西学院大学では、AI を使いこなす教育モデルが進められている。
- ・ DX は、生産性向上のことになるので大学では教えていない、また、ビジネス（収支）の現実も教育していない。
- ・ 教員個人ではなく、分野横断で横串のテーマを、興味・関心を持って取組んでもらえる仕組みが考えられないか。
- ・ データ系とコンテンツ系のオープンイノベーションの小規模な授業モデルとして、AI・データサイエンスとコンテンツ制作系を作成し、検討することにした。

V. 今後のスケジュール

次回の委員会は 12 月 17 日（木）に開催し、新しい価値を目指す PBL 授業の普及・推進方策について検討することになっている。